

令和2年度第1回社会教育委員会議 議事録

日 時 令和2年9月17日（木）10時～12時

会 場 大阪府新別館南館8階 大研修室

出席者 新崎委員、大平委員、芦澤委員、中務委員、明貝委員、森下委員、森本委員、

議事（1）教育コミュニティづくりにおける地域人材の養成について

議事（2）「第3次大阪府子ども読書活動推進計画」の総括について

議事（3）「第4次大阪府子ども読書活動推進計画」の策定について

議事（4）「大阪府視覚障がい者等の読書環境の整備の推進に関する計画（読書バリアフリー計画）」の策定について

その他 令和2年度近畿地区社会教育研究大会（大阪大会）の延期について

<意見・質疑要旨>

◆議事（1）教育コミュニティづくりにおける地域人材の養成について

《概要》

（委員） 「新規人材の確保に向けた市町村への提案事項」について、まず、広報活動は絶対に必要だと思う。しかし「多様な機関等との連携の促進」について、「府内の大学等や地域の高校との連携」とあるが、これは少し気になる。教育コミュニティづくりには「地域の大人等と子どもと一緒に楽しみながら、顔と名前が一致する、地域を作ってゆく」という理想像があるが、その実現が困難な中で、ある種「やむを得ず」学生にお願いして遊んでもらっているといった現実がある。しかし、それに慣れてくると、本来の「夢」であるべきその理想像を忘れてしまう。市町村担当者に見れば、「子どもは集めているが、協力してくれる大人がいない。人が足りない」という状況から、「ならば、どこか他所にお願いする」という発想になるのだろうが、本当は、その「夢」の実現のために、「何故、地域の人が少ないのだろうか」ということを考えないといけないのに、「地域の大人が楽しんでいない」ということが分かっているがそれを解決せず、他所に頼みに行って、結果、少しずつ、本来めざすべき方向から外れていってしまう、といったことが起こる。「スポーツ推進関係の部署や民間のスポーツクラブとの連携」という提案も書かれてあるが、私の地元地域でも卓球協会やバドミントン協会にお願いはしており、子どもたちが楽しんでいるだけでなく、そんな子どもたちの様子を見て協会の方にも喜んでもらっている。とは言え、協会員といっても地域の方々なので、時として都合で遅れてくることもあるのだが、そんなときに我々がそのことを指摘してしまうと負担となってしまふ反面、それが子どもたちからであれば、逆に「子どもたちにそれだけ期待されている。楽しんでもらっている」という証となり、かえって喜んでもらえる。そういったことを踏まえて我々が立ちまわることで、両者に楽しく参加してもらえる。そういった「現場の努力」というものがある。ところが、例えば行政関係者や市町村担当者が、それを見て「忙しい中、参加に苦慮されているな」「個人の都合もある中、子どもたちのニーズに応えきれていないな」と判断し、例えば隣の高校のバドミントン部に依頼しようかとなると、新たな出合いやつながりができるという意味ではダメという訳ではないが、子どもたちにとっては地域の大人ではなく見ず知らずの人が来ることになり、「地域の大人と子どもたちが」という本来の狙いから外れてくる。そういった危惧を感じ、それに対して何か仕掛けていかねばと、全般的に感じる。

- (委員) 同感である。「人が足りないからどこかに頼む」といった人財の資源化ではなく、支援する側とされる側のどちらにとっても学びとなり、互いに豊かになっていくといった「相互実現」という発想が大切だ。その意味でコーディネーターの役割は非常に重要である。
- (委員) 関わっておられる方々の高齢化が気になる。子育て世代は色々大変だとは思いますが、市の担当者に聞くと、子どもを巻き込もうとしているいろんな取組をしても、やはり親御さんが働いてらっしゃるといったこともあり、最近はなかなか来ないそうだ。また、どのボランティア団体でも跡を継ぐ人がいない。70代、80代の方が中心となって活動されている中で、60代の方は「若手」である。さらに、私の地元の市には高等学校は1校、大学はない。そういった条件下では、積極的に取組を行わないと、若い世代との連携は非常に難しい。
- (委員) 学生との連携と言えば、11月に個人でイベントを計画しているのだが、その際に大学生にも協力を依頼しようと考えている。通常であれば、教授にお願いしてゼミの学生に来ていただくということが多いが、昨今は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、学校側から地域活動に制限がかかっている状況のようだ。そんな中で協力をしてもらうために何が必要かを考えたときに、やはり完全にボランティアで来てもらうのは非常に心苦しい。わずかでも対価を支払うことは必要ではないかと思う。ただ、主催者側の負担や、コロナ禍の中、人数制限がかかって十分な人数を集めるのが難しいといった事情もあり、難しい。
- (委員) 地域活動においても学校教育活動においても、新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の状況の中で、どのように取り組んでいくかという問題がある。また、学生も経済的に厳しい状況があり、ボランティア活動を勧めても「行きたいけど行けない」「働かないとやっていけない」という声を聞く。そんな中では「きっかけ」という意味での謝金も可能な限り検討していく必要があるかも知れない。
- (委員) 先の意見にもあったが、他所から人材を呼んできたり、謝金の有無でできる・できないということではなく、「自分の住んでいる地域で、自分たちが、自主的にやろうよ」というところに本来の目的があると思う。また、アンケート結果を見て、70代以上の回答者が一番多いという結果に驚いた。確かに30代、40代の方は忙しいだろうが、50代はもう少し数字が伸びないだろうか。ちょうど子どもが独立しだす年代だし、社会に対して役立つことがしたい等、何かやりがいを求めている人が実は潜在的に相当数いるのではないだろうか。そういった方々は、やりがいがそのまま報酬となるだろうし、そのやりがいによって人生がより生き生きとするだろう。もしその需要と供給がすれ違っているのであれば、合致させるようなアイデアがあれば良いと思う。
- (委員) 私も、取組の本来の目標・理想を忘れてはいけないと思う。その上で、例えば「地域の活動に参加し、成長して自分も教える立場となり…」といったことができている子どもたちは、大人になるにつれて地域との関係性もできあがっていき、気付けば70代になっても地域の活動に取り組んでいる、といったふうになるだろう。しかし、多くの子どもたちはそういった経験が無く、子ども会等で自分がお世話になっていても、それが終われば関係が絶たれてしまうといった状況があると思う。多くの大学で必修単位としてボランティア活動をカリキュラムに組み込んでいるが、そういったことをどんどん進めるべきだ。地域での活動を体験してもらうこと

で、自分の地域がどのようになっているかに気付く、そういったきっかけを通じて地域に根付く人が少しでも出れば、そこからまた広がっていくのではないか。その意味で、高校生や大学生といった年齢の若い方に活動を経験してもらうということが大切だと思う。大学でのそういった取組は広がっているところだと思うが、是非、全ての大学で実施できるよう、調整していても良いのではないか。

(委員) 大学では、体験活動を通して学校以外の場で学ぶ、「サービスマーケティング」という学習方法がある。そういったことをきっかけに関わりを作っていくというような仕掛けづくりが大切である。

(委員) 回答者の年齢で最も多いのが70代以上というのは、参考資料1—2の広報の方法を見ると納得できる。広報誌、ポスター、チラシ、市のホームページなど、各市町村で様々な方法が用いられているが、どれも年齢の若い人にはつながっていかない広報の仕方だと思う。恐らく、ホームページなど、よほどの意志が無いと見る学生はいないのではないか。大学生がどこから情報を得ているかと言えばSNSである。年齢の若い人をターゲットにするのであれば、そういった層が利用する情報サービスを使わないと、伝わらない。また、大阪府の取組なので、府内の学校を広報の対象としていると思われるが、実際には、学生がボランティアに参加したいと思う場所は通い先ではなく、地元である。府内の学校にだけ広報しても、府外から府内の学校に通っている学生はターゲットになりにくく、府内から府外の大学に通う学生には情報が届きにくい。その意味で、あまり地域や枠を限定せず、多くの学生の目に触れるような方法で広報を行うべきである。

(委員) 東大阪市では、第5期地域福祉計画策定にあたって市民アンケートを実施したが、その中でもSNSから情報を得るとする人の割合が高齢者を含め全世帯で増えてきていた。また、広報を行う際のポイントとして、活動内容の説明も必要ではあるのだが、それよりもボランティアの方々の笑顔や活動の様子などの写真、感想等を先に示し、それに続けて説明という順序の方が良い。活動の意義や説明が最初に来ては学生は興味を持ちにくいので、まず、面白さや楽しさを前面に出して惹きつけ、活動を通して意義や自信の成長を感じ取れるような方法を提案する。もう一つ、今、60代、70代が増えているということだが、生涯学習という観点から見たときに「アクティブシニア」という考え方がある。「高齢者が増えている」とネガティブに捉えるのではなく、「高齢者が活動に生きがいを持つことで、いくつになっても活躍できる方が増えている」とポジティブな発想で表現していくと良いと思う。

(委員) 私の周りでは「高貴」高齢者と呼んだりしますね。

(委員) そういった、ちょっとした遊び心を入れつつ「面白さ」から入ってもらい、その中で活動の意味を理解してもらえれば、と思う。それと、ボランティア団体への周知でいうと、各市町村に必ず社会福祉協議会があり、そこにはボランティア連絡会やボランティア連絡協議会といった、福祉に限らない様々な活動をされている方々がいる。教育と福祉の協働の観点からもそういった社会福祉協議会に対して、教育コミュニティづくりの意義について伝え、協働していくという発想も大切だと思う。また、この取組は地域教育振興課が行っているが、社会教育と学校教育の連携も視野に入れ、学校教育を担う部署との協働も検討してほしい。

(委員) 小中学校では、学校からご家庭へのお便りなどで、ボランティア活動への参加を募る案内がよくあった。大学生本人にボランティア活動の周知を行うと同時に、先に話した、ちょうど子ども手が離れてくる「大学生の子どもを持つ親」にも生きがいを提案するような形で周知できれば良いのではないか。

(委員) よく、引きこもりの青年に社会活動を促すときに、実際に不登校の経験がある方が自身の経験を話す中で次の世代にロールモデルを示すといった手法が取り上げられたりする。様々な地域活動において、例えば小学校のときにヤングリーダーの指導を受けた子どもたちが、それをロールモデルにして、中学生・高校生になってから次の世代を担っていくような活動も大切ではないか。小さい頃からそういった経験をしていないと、大学生になってからいきなりボランティア活動と言われても、なかなか興味を持ってもらえない。

◆議事(2)「第3次大阪府子ども読書活動推進計画」の総括について

◆議事(3)「第4次大阪府子ども読書活動推進計画」の策定について

(委員) 読書部会では、第3次計画の成果指標である読書好きとは何かという哲学的な問いかけから始まった。「読書とは何か」ということで、本を一冊読むということも大事だが、それだけが読書ではないと考えている。「字」が読めるから「文章」を読むことができるわけではないことから、本を一冊読むことを読書と限定するのではなく、いわゆる情報を活用できる、内容をきちんと理解できるようにする、ということを考えなければいけない。これだけ情報があふれている社会の中で、情報を読める人になるということが、子ども読書活動推進計画の中に含まれるべきだと考えたし、国が策定した計画の中にも含まれているので、それを踏まえてこれまでの読書計画と読書の概念を少し変えるとともに、本を読まないということに注目してもらった。本を読まないというのは、理由はいくつかあり、時間がない(時間は作るものなので、時間がないから読まないというのは、本当は理由にはならないと思うが)、読みたくないから読まない、周りに本がない等、本を読む環境がなく、読みたいけど読めない、即ち、今、教育格差が経済格差だといわれて久しいが、そういった本に対してというか、文化的な活動に対して、費用を割く余裕がないということが考えられる。行政として考えていただきたいのは、読みたい子というのは、どんな環境の中でも読むので、読みたくても読めない人、経済的な理由で読めない人、それから何らかの障がいがあって読むことが難しい人、そういった人たちがもっと本を読んだり、本だけではなくいわゆる情報を読めたりするというような活動に参加できるような環境を作っていきたいということを考えて、話をした。

(委員) 本を読むこと、読書とは、文学作品を最初から最後まで読むことではないと考えている。しかし子どもたちは「最初から最後まで読むことが読書である」というのが頭に入っているから「読書をしますか」、「読書は好きですか」という質問をすると、「嫌い」、「好きな本がない」という否定的な答えになると思うので、設問が悪いのではないかという話をした。だから、子どもたちには、本を読むということは、実は、途中で嫌だったらやめていいんだよ、違う好きな本があれば、そちらへ移ってもいいんだよ、写真の本や、クイズの本でもいいんだよという幅を広げた呼びかけというか、こちらの方から、もっと楽しいものなんだよ、もっと幅の広いものなんだよということアピールする必要があるということ部会でも話し、こちらの資料に反映

してもらった。今週火曜日に、ある中高一貫校に伺った。私学なので、生徒の家庭環境も全く違うし、学校の取組も違うが、公立の中学校、高校との格差というのをまざまざと見せつけられ、とても素晴らしい学校だっただけに、ショックを受けた。この学校には探究科というのがある。探求学習のとても有名な先生がいらっしゃる、中学3年生や、高校生に論文を書かせている。テーマを見つけて、そしてそれに沿った資料も揃えていくために学校図書館もすごく充実していた。それをそのまま公立でというのは難しいかと思うし、その意味で子どもたちの教育の平等を実現するのは容易ではないと思ったが、少しでも良いアイデアがあれば、公立の学校の方でもこういうことを取り組んでいただければなと痛切に感じた。

(委員) 保護者の立場から言うと、自分の子どもにも、本を読むことが得意な子、苦手な子どもがいる。先ほどもあったが、得意な子どもというのは、放っておいても本を読むし、例えば「授業始まったよ」と先生に怒られるぐらいまで本を読む。一方で、苦手な子どもは、字が読めないという訳ではないが、本を読むのが好きではない。ただ、その子も自分の興味があることであれば、とことん読む。一緒に書店に行って「どれがいい？」と聞けば、自分の興味関心のあるジャンルの本であれば、「これが欲しい」というように本を入手して、とことん読むということがある。だから、何に興味があるのか、子どもの興味にヒットさせるということがすごく大事だと思う。また、読書の機会を広げるという観点で言うと、経産省の方で、GIGA スクール構想が進んでいるというふうに聞いている。それと絡めるというのは難しいだろうか。電子図書というところになってくると知れないが、先の話であったように、感覚的なものから入る子どもも多いということなので、そういう意味で電子図書、電子書籍を活用していくということをしっかり推し進めていくということが必要ではないかと思う。それと、リサイクル図書をされている図書館に協力をいただいて、イベントの中で無料配布できるリサイクル図書を提供していただくということを現在計画している。子どもが参加するイベントなので、好きな本があったら持って帰ってよいというふうにしたいと考えている。大人も子どもも時間に余裕がないというのが資料からも読み取られ、世知辛いと思うが、そういった形で図書館自身に地域活動に参加してもらうことができるのであれば、読書の機会を広げる一環として、読める環境がない子どものサポートもできるのではないかと思う。

(委員) 読書活動の推進は、何を目標としているのか。読書活動を推進する目的が、「子どもが、文章を理解できるようにする」ということであれば、これで良いと思うが、私は、読書というのは、最後まで読破するかどうかは別として、やはり「物語を読む」ということだと思っていて、辞典等で調べたりすることは、「調べる」という読書とは違うものだと思っている。物語を読んで情景を頭に思い浮かべ、人の機微といったものを理解していくということと、文章を理解するということとは、また違うことではないか。文章を理解するのであれば、AIでもできると思うが、人の機微を理解するのはAIではできない。人間関係を作っていく上で必要な能力というものが読書、物語を読んで養われると私は思うし、そういったことが必要なのではないか。子どもたちだって、調査等で回答する際は「読書」を「物語を読むこと」と捉えるだろう。とするならば、果たして、この指標に対してこの内容で本当に良いのだろうか、と思う。

(事務局) この計画には「子どもの読書活動の推進に関する法律」という根拠法令があり、その基本理念である、「言葉を学ぶこと」、「表現力を高め、想像力を豊かにすること」を目的としている。また、ご意見をいただいた「機微」について、本を読むことは、自分の考えと異なる様々な著者

の考えに触れることであり、そういったことからコミュニケーション能力や機微を高めていくことができると思われるため、読書活動推進上、必要と考えている。

(委員) AIが行っていることの実態は「統計」なので、(文章)理解というものとは違うかと思う。全く物語を読まない、物語を読むこと自体を否定するというのではなく、国の指標にもあるように、物語を読むことも含めて、文章を読んで理解をするということがとても大事ということである。読書というと、物語(を読むこと)に特化しているのが現状だが、それは徐々に変化してきている。不易流行、変わってはいけないこともあるのは確かだが、本を読まないということはあるけれども、これだけ活字があふれる社会なのだから、その活字をいかに理解し、自分の必要な情報を取り込めるかということも大切である。物語を読んで感情を高め機微を知ることと、文章を理解するということの両方が必要なのではないかと思い、現在、これを考えているところである。部会では、ナビゲータ的な大人が必要だということをお話したが、ただそれに任せて読めばいいという訳ではなく、そういった大人が子どもたちに、「本の勧め」ができるということが必要だと考えている。また、この計画は「子ども読書……」であり、学校教育だけではなく、0歳～18歳までが対象となるので、公立図書館や行政、保健センター等も関わらなければならないのではないかと話をした。昨日まで千葉で、IT教育ソリューションに参加していたのだが、GIGAスクール構想の話も出だし、STEAM教育の話もしてきた。そういうことも含めて、これから考えていきたいと思っている。どうも電子書籍やインターネットが否定的な捉え方で考えられているが、あれほど便利なものはない。読書とは少し違うかも知れないが、情報を読むということでは電子も紙も一緒なので、「正確に自分の必要な情報を読める」というような感じを目標に作っていったらと思う。

(委員) 計画の「視点」に関して2つ意見がある。1つは、「本に親しむ」について、今般の新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて公立図書館や学校図書館もなかなか使用ができない状況の中で、ますます本に触れる機会の格差というのが出てくるだろうと思う。相対的貧困といわれている経済的に厳しい状況の家庭の子どもの中には、本を買ってもらえないといった子どももいるという状況もあるので、子どもの頃から本に親しめるような環境づくり、どのような方法であっても子どもが身近な本にアクセスできるような仕組みというのを、家庭に任せるだけでなく、公的にも保障していくことが大きなポイントだと思う。もう一つは、学習症等で活字を読むのが苦手な子どもが情報を得るため、心の機微を得るための一つのツールとして、電子媒体を積極的に考えていくことも必要ではないかと思う。

◆議事(4)「大阪府視覚障がい者等の読書環境の整備の推進に関する計画(読書バリアフリー計画)」の策定について

(委員) 千葉市の県立図書館に行ったときに 児童資料室の絵本の棚に大活字本や点訳絵本があった。どうして絵本の棚に点字の資料があるのかと聞くと、目の不自由な親が目の見える子どもに読んであげるために、点字のコーナーではなく児童資料室に置いている、とのことで、新たな発見だった。私たちは、どうしても点字書籍や大活字本といった書籍を、当事者本人が読むことを前提に考えていることが多いが、当事者がご家族、特に自分の子どもに読んであげたいというニーズがある。点訳を県立の方がされているようだが、親が子どもから聞かれたときに答え

られるように、簡単な絵の説明等も入れているということだった。もし府立の図書館でも既にされているのであれば恐縮だが、そうでないなら、是非そういった取組も取り入れていただきたいと思う。

(委員) 大阪府のホームページでは視覚障がいの方への対応はされているのか。

(事務局) 基本的には音声読み上げに対応している。

(委員) 内容的にはとても良いと思うが、きっちり予算取りはされているのか。予算が無いとこういった人材育成や機器の充実は無理。予算立てや支援はどのようになっているのか。

(事務局) 予算については、文部科学省をはじめ、国全体で概算要求が遅れていることから、具体的な予算については現時点では分からない。大阪府としては基本的には既存の予算の中でということになると思われるが、ポスターやリーフレット等を作成し周知するといったことはできると考えている。ただ、サピエ図書館の会員加入の促進や、財源の確保については国の基本計画にも謳われているので、活用できるものがあればもちろん積極的に活用したい。機器については、市町村でサピエ図書館に加入できるような体制をとってもらうことが先決かと考えている。

(委員) つまり、各地方自治体の事情や優先順位の問題になるということ。罰則規定などは当然ないと思うが、素晴らしい素案ができていながら、それが眠ったままになるといった残念なことになってほしくないという思いがある。

(委員) こういった条例を、作っただけで終わってしまうのは良くない。是非、積極的に推進していただきたい。

◆その他 令和2年度近畿地区社会教育研究大会（大阪大会）の延期について

(委員) 新型コロナウイルス感染症が拡大する中で、様々な事業が中止になったり停滞したりしているが、教育コミュニティづくりや、読書活動の推進も含めて、「今、できること」をしっかりと取り組んでいていただきたい。